

文学（八）

文学史

〜三島由紀夫〜

今回の学習のポイント

「三島由紀夫」について知ろう！

国語監修・執筆

中澤 匠吾

三島由紀夫（みしま・ゆきお）

大正十四年（1925）〜昭和四十五年（1970）。東京出身。本名、

平岡公威。

ひらおかきよたけ

小説家。劇作家。他に評論や随筆なども手がける。昭和期、戦後日本の代表的な作家である。

代表作 小説『金閣寺』『潮騒』『仮面の告白』『豊饒の海』 戯曲『近代

能楽集』 など

経歴

幼少期から詩作や読書に親しみ、学習院中等科では文芸部に所属し文学の才能を発揮しました。昭和十六年（1941）、三島が十六歳のときに発表した短編小説『花ざかりの森』が文芸誌に掲載され、賞賛を受けます。その後も執筆を続け、学習院高等科から東京帝国大学法学部と進み、卒業後は大蔵省（現在の財務省）の官僚となりますが、その間も執筆活動を続けました。やがて創作活動に専念するため退職し、昭和二十四年（1949）に刊行された、長編私小説『仮面の告白』は高い評価を受け、作家としての地位を築いていくこととなります。

以後も精力的に執筆活動を進めますが、晩年には日本の行く末を憂い、政治的な言動を強めていきます。昭和四五年（1970）十一月、自衛隊市ヶ谷駐屯地で隊員に向けた演説のちに自ら命を絶ち、その死は社会に大きな衝撃を与えました。

代表作 『金閣寺』

番組の中でも文章の一部を引用している、三島由紀夫の代表的な作品の一つである長編小説『金閣寺』は、昭和三十一年（1956）、三島が三十一歳のときに刊行されました。この作品で読売文学賞を受賞しています。海外でも高い評価を受け、三島由紀夫の名声、作家としての地位を確固たるものにした傑作です。昭和二十五年に起こった放火による金閣寺焼失という実際の事件が作品のモチーフとなっており、三島の描いた作品では脚色がなされています。

生来の吃音（きつちん発音が不自由であること）を持った主人公（青年僧）が、金閣の

美しさに魅せられるということを軸に、自らの生に対するコンプレックス、それと対極にある「美」への執着や苦悩を抱き、美の象徴である「金閣」に火を放つという結末を迎えます。

表現の魅力

三島作品の表現の特徴は何といっても「修飾する」表現の多彩さにあります。文章を読んでみると、ある対象を言い表すときに修飾語を二重、三重と徹底的に重ねていき、緻密に描いていることがわかります。

番組では『金閣寺』から文章を引用し、三島由紀夫の「表現」に注目して、その言葉の美しさに触れていきます。作品の性質上、建築の専門用語や仏教用語など一般的には少々難解な語句も登場しますが、事物や情景、心理描写などについての微細にわたる表現は、他には到底まねのできない華麗さ、荘厳さを備えていると言えるでしょう。

番組で取り上げている、金閣を「船」にたとえた表現のほか、さまざまな言葉で金閣の美しさなどについて表現されています。それがどんな印象を生んでいるかを理解するとともに、文体の美しさを感じてみてください。

その他の作品

前述の通り、『金閣寺』全文の表現や内容から、難解で硬い印象を受けるかもしれませんが。しかし、数ある作品の内容には幅があり、比較的親しみやすい、読みやすいと思われるものもあります。いくつか簡単に紹介します。

『潮騒』（昭和二十九年）

南の小島を舞台にした長編小説。若い漁夫と海女がいくつかの障壁を超え、恋を成就させていくという、純朴な恋を描いたストーリー。映画化もされている。

『永すぎた春』（昭和三十一年）

こちらも恋をテーマとした物語。長い婚約期間の中にある男女に起こる騒動や危機、心の動きを描いている。『金閣寺』と同時期に連載された作品だが、内容、表現は対極的といえ、全く異なっている。

『美しい星』（昭和三十七年）

SF的な要素を取り入れた異色の小説。作中には宇宙人や空飛ぶ円盤などが登場。米ソの冷戦、核開発の進行という世界の動向を背景に、人類滅亡の不安などを描いた作品。映画化もされている。

『命売ります』（昭和四十三年）

自殺に失敗した主人公が「命を売る」という新聞広告を出し、それを利用してようとする依頼人と主人公のやりとり、心の動きを描いた作品。娯楽性のある小説

であるが、「命」がテーマにあり、三島の死生観がうかがえる。

まとめ

三島由紀夫には、辞書を引くのではなく「読んでいた」という逸話があるそうです。それほど深く、真摯に言葉と向き合っていたからこそ、独自の言葉、表現の世界を築き上げていくことができたのではないのでしょうか。

日常的な表現においては「シンプルでわかりやすい」ことが好まれるという側面がある一方、文学作品では緻密な構成のもとに言葉を精選し、豊かな表現によって作品固有の美しい世界が生み出されていくことになるのです。

豊富な語彙によって紡ぎ出された、美しい文章をぜひ読み味わってみましょう。今回の学習では、一作品のごく一部の鑑賞に限られますが、実際に作品を読んでみると、「こんな表現があったのか」という新しい発見や驚きがあると思います。